



「悔しい」を原動力に

立川志の春 Tatekawa Shinoharu

小学校時代の三年間、父親の転勤でアメリカに住んでいたんですが、英語に関しては悔しい思い出があるんです。

アメリカに行って、現地校に通い始めて半年あまりが経った頃のことでした。ある冬の日、クラスの人気者の手袋が片方なくなったという事件がありました。クラス中で教室のどこを探しても出てこない、もう諦めるしかないかと思った時、彼が私のところへ来て言いました。「お前の手袋、俺のと同じ色してたよな。お前が盗ったんじゃないか？」運の悪いことに、その日に限っていつもの優しい担任の先生が休みだったため、代理の若い先生が入っていました。彼の言葉を受け、その先生が言いました、「盗ったのなら早く出しなさい」。クラス全員の注目が私に集まりました。

自分に疑いがかけられているのだということがわかるくらいは、英語が話せるようになっていました。けれども自分に向けられた疑いを晴らせるほどには、うまくはなっていませんでした。「なんで同じ色の手袋をしているだけで僕を疑うんですか？」「なくしただけ、うちに忘れただけじゃないんですか？」「僕を盗人扱いしたあなたのことを、孫の代まで許しませんよ」。言いたいことは頭の中に色々ありましたが、口から言葉は出てきませんでした。かわりに目から悔し涙がポロポロポロポロこぼれ落ちていました。

しばらくして、人気者のジャンパーのポケットから、迷子になっていた手袋が出てきました。その時私の心の中で「カチッ」とスイッチが入る音が聞こえました。「二度とこんな悔しい思いをしないように、早くしゃべれるようになるんだ」。同時に「困った時に自分の身を守るのは誰もいない、自分だ」と、

心の中に悪魔を飼い始めた瞬間でもありました。それから性格は少し悪くなりましたが、英語力は飛躍的に向上しました。言いたいことが言えるようになりました。自己主張が出来るようになるにつれ、友達が増え、アメリカのことも好きになりました。

悔しいという思いはその後の原動力になります。アメリカでの大学進学、帰国しての会社勤めを経て、落語家になって前座修業を始めると、徒弟制度のもとで自己主張は徹底的に否定されました。「言いたいことがあるなら、早く言える立場になりなさい。やりたいことがあるなら、早くやれる立場になりなさい」ということです。これも、早く前座を卒業しようという思いの原動力になりました。その割には人の倍の八年もかかっているのに、あまり説得力はありませんが。

褒めて伸ばすのが喜びを原動力とする教育ならば、けなして伸ばすのは悔しさを原動力とする教育なのでしょう。両方あっていいと思います。今は徒弟制度以外ではけなして伸ばす式の教育方針は流行らないようです。でも悔しい思いをする機会が奪われてしまうというのはもったいない気がします。今、私がしゃべる職業についていて、日本語に加え英語でも落語を演っているのは、どこかであの時の悔しい思いがきっかけになっているのだと思いますから。

だからと言って常にけなされたいわけではありません。最後に言っておきますが、私は褒められるのは大好きです！！

たてかわ しのはる

落語家。立川志の輔の3番弟子。2002年10月入門、2011年1月二つ目昇進。幼少時と学生時代の計7年間を米国で過ごす。米国イェール大学卒業後、総合商社にて3年半勤務。古典落語、新作落語、英語落語を演じる。著書に「誰でも笑える英語落語」(新潮社)ほか。